



Data

監督・脚本: ルー・ジュネ

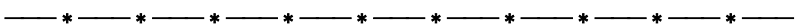
出演: ノエミ・メルラン/ニール
ス・シュネデール/バジャマ
ン・ラベルネ/スカリ・デル
ペラト/アマラ・カザール/
マチルド・ワルニア/メロデ
ィー・リチャード/エミリア
ン・ディアール・デトウフ/
カメリア・ジョルダナ

👁️👁️ みどころ

古今東西を問わず“性豪”を誇る男は多いが、生涯で2500人の女性と関係を持ったと言われ、“エロスの司祭”と称された、フランス象徴主義の詩人ピエール・ルイスをあなたは知ってる？

また、『宋家の三姉妹』(97年)の霏齡、慶齡、美齡は三人三様に有名だが、『コレット』(18年)のヒロインにも並ぶべき、本作のヒロイン、マリー・ド・エレディアを知ってる？寡聞にして私は両者とも知らなかったが、2人の往復書簡と大量に保管されていたポルノ写真(?)から、2人のめくるめく情事と愛人関係の姿が鮮明に！

『愛と死をみつめて』(64年)は本も歌も映画也大ヒットしたが、それはあくまで純愛。それに対して、本作はかなりエッチだが、女性監督ルー・ジュネの美しい演出にかかるとお見事な官能絵巻に！



■□■ 仏の詩人、エロスの祭司、ピエール・ルイスとは？ ■□■

古今東西を問わず、“性豪”を誇る男は多いが、生涯で2500人の女性と関係を持ったと言われ、“エロスの祭司”と称された、フランス象徴主義の詩人ピエール・ルイスを、あなたは知ってる？彼はまた、作曲家ドビュッシー、小説家ジッド、詩人オスカー・ワイルドなど高名な芸術家たちと交友を結び影響を与えたとされている。しかし、私は寡聞にして、フランスの詩人アルチュール・ランボーは知っていても、19世紀末から20世紀前半にかけて活動した詩人ピエール・ルイスは知らなかった。

また、本作を観れば、ピエール・ルイス(ニールス・シュネデール)の親友で本作のヒ

ロインであるマリー・ド・エレディア（ノエミ・メルラン）を巡って恋敵になったアンリ・ド・レニエ（バジャマン・ラベルネ）も20世紀初頭のフランスで最も重要な詩人と称されているのだが、私は寡聞にして彼も全く知らなかった。更に、マリーも本作ラストではジェラルド・ドゥヴィルという男性名で小説を発表し大人気になっていたが、それも私は寡聞にして知らなかった。したがって、本作ではそんな3人の男女についてしっかり勉強したい。

■□■大量のポルノ写真と往復書簡から本作を着想■□■

本作の脚本を書き監督したのは、短編映画を経て、本作で長編劇映画監督デビューを果たした女性ルー・ジュネ。彼女は、詩人であると同時に一時もカメラを手放さない熱心なカメラマンだった(?)ピエール・ルイスが、大量に撮影しアルバムに保管していた大量のポルノ写真(?)およびピエールとマリーの間で交わされた大量の往復書簡(もともと、マリーからピエールへの手紙は消失してしまっている)に着想を得て、本作を監督したらしい。

1963年に出版された、ミコ(大島みち子)とマコ(河野實)の3年間にわたる往復書簡をまとめた『愛と死をみつめて』(64年)は、本でも歌でも映画でも大ヒットしたが、それはタイトル通り愛し合う若い2人が、愛と死を見つめながら交わした書簡集だからだ。それに対して、ピエールとマリーの書簡集は?さらにピエールのアルバムに収められたマリーの大胆なポーズの肢体は?

1970年代に大ヒットした日活ロマンポルノは、とりわけ初期のものに名作が多いが、本作も女性監督特有の視点と美しさに満ちあふれていると同時に、19世紀のパリにおける3人の主人公たちの生きざまがイキイキと描かれている。キーラ・ナイトレイが主演した『コレット』(18年)、『シネマ45』177頁)も興味深かったが、本作もなかなかのものだから、その面白さをしっかり鑑賞したい。

■□■結婚させられても、愛人にすれば両手に花! ■□■

『コレット』を見ても、19世紀のフランスの女流作家コレットが、結婚については両親が押しつける男性を受け入れざるを得なかったことがわかる。したがって、冒頭に登場するエレディア家の3人の美しい姉妹である長女エレヌ(メロディー・リチャード)、次女マリー、三女リーズ(マチルド・ワルニア)のうち、最も文学に精通している次女のマリーが新進気鋭の詩人ピエールと出会い、一目で恋に落ちたにもかかわらず、マリーの両親は貴族出身のアンリとの結婚を決めてしまったから、アレレ。

『宋家の三姉妹』(97年)でも、次女の慶齢は父親チャーリーの反対を押し切って、チャーリーが同志として応援していた孫文の秘書として働いているうちに相思相愛となり、結婚に踏み切ってしまった(『シネマ5』170頁)が、マリーは泣く泣く親が押しつけたと

おり、アンリと結婚することに。他方、ピエールとアンリは親友同士だったうえ、ピエールがマリーにぞっこんだったことは互いの了解事項だった。したがって、アンリがそんなマリーと結婚することに、アンリは一種の罪悪感も・・・？しかし、本作を観ていると、マリーはそんな2人の男の上をいていたようで、アンリと結婚させられたら、ピエールは愛人にすばい、と考えたようだからすごい。しかも、ピエールはアンリと異なり、結婚という形式に全くこだわらないタイプだったから、それに大賛成。

しかして、本作にみるマリーとアンリ（夫）、ピエール（愛人）という2人の男（詩人）を巡る、めくるめく官能の日々は如何に？本作導入部では、それをしっかり楽しみたい。そこでの小道具は、19世紀には珍しくピエールが愛用するカメラ。さあ、自らモデルを指導し、自ら撮影し、自ら現像するピエールの写真撮影（ポルノ撮影？）のレベルは如何に？

■□■どっちもどっち？いや、やっぱり男の方が身勝手？■□■

『愛と死をみつめて』は往復書簡が完全に残っていたから、曲のイメージも映画のイメージもしっかり固めることができた。しかし、ピエールとマリーの往復書簡はピエールからのものしか残っていないそうだから、2人の恋心のやりとりはルー・ジュネ監督が想像で作りあげるしかない。しかし、アルバムに収められた、今でもポルノ写真として十分通用するほど生々しい女性たちの淫らな写真が2500人分もあれば、ピエールの“性豪ぶり”をスクリーン上に描き出すのは容易。もっとも、それは描き方によっては極端な“エロ”になってしまうが、さすが女性監督ルー・ジュネの手にかかると、その演出はすばらしい。

他方、男だって女だって嫉妬心を持っているのは当然だから、いざ目の前に別の男、別の女を見せつけられると嫉妬心が湧いてくるもの。そのため、本作中盤では、ピエールのもう1人の愛人であるゾーラ・ベン・ブラヒム（カメリア・ジョルダナ）を巡って、少しだけピエールとマリーの間でそんな論争（ちわゲンカ）が見られるので、それにも注目！しかし、あの時代では、やっぱり男の身勝手さの方が優位にあることがハッキリわかる。ところが、そう思っていると、マリーはピエールと切れている間に、ちゃっかりピエールの友人であるジャン・ド・ティナン（エミリアン・ディアール・デトッフ）と愛人関係に収まっていたから、これまたすごい。ここまで互いにやりたい放題やっていたら、どっちもどっちと言わざるを得ない。

そんな2人と対照的なのが、夫のアンリ。ピエールとマリーとの“男女の仲”は半ば公然だし、マリーの机の引き出しの中にはポルノ写真を収めたアルバムまで入っていたのだから、アンリが2人の浮気に気付かないはずはない。したがって、アンリが大きな嫉妬心を持ち、毎日をじりじりしながら生きていたのは当然。しかして、ルー・ジュネ監督は、そんな男2人女1人の三角関係をいかに演出？

■□■ピエールとの情事のためなら、妹も活用？■□■

私が近時ハマっている「華流ドラマ」を観ていると、権力と男女関係を巡る権謀術策のすさまじさに驚かされるが、本作を観ていると、マリーのピエールとの情事のためなら何でもありという執念と権謀術策ぶりに驚かされる。ピエールと離れていた間の術策が、ショートトリーフとしてのピエールの友人ジャンとの愛人関係なら、ピエールの妻には結婚適齢期を迎えた(?)妹のルイーズの活用を！それがマリーの術策だったから、ビックリ。ルイーズがピエールの妻に取まれば、自分がその家庭を訪問するのは自由だし、ピエールとの情事もやりたい放題！それがマリーの術策でピエールもそれに合意したから、この2人の相性は抜群だ。もちろん、ルイーズはマリーとピエールのそんな術策は知らなかったが……。

本作ラストでは、ルー・ジュネ監督が描くそんな奇妙な男1人女2人の三角関係をしっかり確認したい。ちなみに、『コレット』では、夫の浮気を認めるかわりに自分の同性愛を堪能するという術策をコレットが採用していたが、それに比べると、私の目にはマリーの術策の方がしたたかに見える。さて、あなたのご意見は？その上、本作ラストで、マリーはコレットと同じように男性の名前ながら作家デビューまで果たしてしまうのだからすごい。『宋家の三姉妹』の三姉妹は三人三様のすごさを見せつけたが、本作にみるエレディア家の次女マリーについては、その才色兼備ぶりはもちろん、その性的魅力と権謀術策のものすごさを本作でしっかり味わいたい。

2019 (令和元) 年1月15日記